



親子ひろしま訪問団



令和7年度訪問の記録

令和7年（2025年）8月5日～7日



秦 野 市

～ 目 次 ～

は し が き	・・・・・・・・・・・・・・・・	P1
I 親子ひろしま訪問団		
1 訪問団の主なスケジュール	・・・・・・・・・・・・・・・・	P2
2 団員名簿	・・・・・・・・・・・・・・・・	P2
3 訪問の概要	・・・・・・・・・・・・・・・・	P3
4 訪問団員（参加者）の声	・・・・・・・・・・・・・・・・	P15
5 訪問団規約	・・・・・・・・・・・・・・・・	P23
II はだの平和の日のつどい	・・・・・・・・・・・・・・・・	P24
III 被爆アオギリ二世の植樹	・・・・・・・・・・・・・・・・	P24
IV 資 料		
1 秦野市の市民憲章・平和都市宣言・平和の日制定文	・・・・・・・・・・・・・・・・	P25
2 広島市平和宣言	・・・・・・・・・・・・・・・・	P26
3 (広島)こども代表「平和への誓い」	・・・・・・・・・・・・・・・・	P28

はしがき

戦後50年を契機に始まった「親子ひろしま訪問団」は、今年で29回目を迎え、278名の親子が広島を訪問しました。

今年は戦後80年という節目の年であります。戦争の悲惨な記憶が薄れる中、平和や命の大切さを多くの市民の意識の中に浸透させ、次世代にしっかりと継承する必要がありますと感じております。今もなお世界各地では、紛争問題が解決しない中、多くの犠牲者が出ています。訪問団員10名にとって、平和記念資料館の見学、平和記念式典への参列、被爆体験談の聴講などの経験は、人間が起こす戦争の最悪の結果を知り、平和であることや命の重みを考える大変良い機会となったと思います。

また、訪問終了後には、訪問団が被爆地ヒロシマで感じ、学んできたことを広く市民へ継承していくため、8月16日に「はだの平和の日のつどい」を開催し、活動報告を行いました。訪問団員の生の声が、会場の多くの人々の心に届いたと思います。

本市では、核兵器廃絶、非核三原則の堅持、恒久平和を柱とした「平和都市宣言」を定め、また、広島及び長崎両市が主導する「日本非核宣言自治体協議会」や「平和首長会議」に加盟し、平和への思いを発信しています。

平成20年6月には、市民一人ひとりが改めて平和の大切さや命の尊さを考える機会として、8月15日を「平和の日」と制定しました。毎年「平和の日」に近い日程で、市民を主体とした様々な平和事業を展開しています。

また、平成21年8月には、市内事業所の協力を得て、市役所に「平和の灯モニュメント」を、自治体としては全国で14か所目、神奈川県内では初めて設置しました。このモニュメントの種火は、同年の「親子ひろしま訪問団」が広島平和記念公園から採火し持ち帰った炎を、「平和のシンボル」として灯し続けています。

今年、訪問団が広島市に届けた千羽鶴はおよそ6万6千羽にもなりました。一羽一羽、平和を願いながら、丁寧に折っていただいた多くの市民の皆様に、心からお礼を申し上げます。抱えきれないほどの千羽鶴の重さに、鶴を折られた皆様の思いを感じながら、心を込めて鶴を捧げました。

平和記念式典への参列や被爆体験談の聴講などの貴重な経験を含め、被爆地広島で見聞きし学んだことを、団員一人ひとりが心に刻み込み、その思いを多くの人々に伝え、また次代へと語り継いでくれることを心から願います。

I 親子ひろしま訪問団

1 訪問団の主なスケジュール

日 時	項 目	内 容
7月22日(火) ① 午前10時30分 ～11時 ② 午前11時～11時 30分	① 説明会	訪問日程等の説明、「はだの平和の日のつどい」での報告方法検討
	② 結団式 市長表敬	市長メッセージ・千羽鶴の受渡し 場所：秦野市役所本庁舎4階 議会第1会議室
8月5日(火) ～ 8月7日(木)	広島訪問	① 原爆の子の像へ千羽鶴を拝納 ② 広島平和記念資料館見学 ③ 平和記念式典参列 ④ 被爆体験聴講 ⑤ 平和記念公園内碑めぐり ⑥ とうろう流し ⑦ 宮島見学
8月16日(土) 午後5時 ～5時45分	はだの平和の日のつどい	訪問の活動報告 場所：メタックス体育館はだの（総合体育館）サブアリーナ

2 団員名簿

保護者 氏名	子ども 氏名	役 割
わたなべ ちか 渡邊 千佳	わたなべ おうすけ 渡邊 旺介 鶴巻小6年	団 長
たかしま まゆ 高島 雅由	たかしま いさ 高島 惟沙 東小5年	副団長
わたなべ あい 渡邊 愛	わたなべ ともき 渡邊 知樹 鶴巻小5年	会 計
さくらい ともこ 櫻井 知子	さくらい あやの 櫻井 綾乃 末広小4年	記 録
しば としのり 芝 敏範	しば しおり 芝 志織 堀川小4年	監 事

3 訪問の概要

(1) 訪問1日目・8月5日(火)

8:07 小田原駅出発

11:38 広島駅着

14:00 広島平和記念公園見学

千羽鶴を「原爆の子の像」に捧げる

14:30 広島平和記念資料館見学



「原爆の子の像」の前で

原爆の子の像

この像のモデル佐々木禎子氏は、2歳の時に爆心地から
1. 7キロメートルの自宅で被爆しました。足が速く、とても元気な子でしたが、小学6年生の時に原爆症を発症しました。入院中、鶴を千羽折れば病気が治ると言われ、信じて折り続けましたが、中学校に入学できずに亡くなりました。

「原爆の子の像」は禎子さんが通った小学校の同級生たちの呼び掛けにより、全国の学校や外国からの支援により建てられました。

原子力の研究でノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹博士は、この子どもたちの気持ちに感動し、博士の筆による「千羽鶴」、「地に空に平和」の文字が彫られた鐘を寄贈しました。その鐘の下に金色の折り鶴がつるされ、風鈴式に音が出るようになっています。この鐘と金色の折り鶴は平成15年に複製されたもので、オリジナルは広島平和記念資料館に展示されています。

訪問団は、広島到着後、市民から託された千羽鶴を手に広島平和記念公園へ向かい、原爆の子の像に捧げました。平和記念公園には世界中から大勢の人々が集まり、原爆の子の像にもたくさんの千羽鶴が捧げられていました。



平和な未来へ夢を託す少女の像



市民から寄せられた千羽鶴の拝納

平和記念公園

この地域は、元々は広島でも有数の繁華街でした。しかし、爆心地に近かったため、原爆投下により壊滅しました。

その後、昭和29年（1954年）に平和を祈念し、建築家の丹下健三氏の手により公園として生まれ変わりました。

園内には平和記念資料館をはじめ、原爆死没者慰霊碑、原爆の子の像、平和の灯、平和の鐘など多くの碑やモニュメントなどが設置されています。

毎年、原爆が投下された8月6日には「原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式（平和記念式典）」が開催され、夜には元安川をはじめ市内六つの川で犠牲者を慰霊する「とろろ流し」が行われています。

平成28年5月には、バラク・オバマ元大統領がアメリカ合衆国大統領として初めて訪れ、原爆死没者慰霊碑の前で、核兵器なき世界の実現へ向けた思いをスピーチしました。

令和5年5月にはG7広島サミットが開催され、G7首脳が原爆死没者慰霊碑への献花や公園内で被爆桜（ソメイヨシノ）の植樹を行いました。

平和記念資料館

平和記念資料館は、被爆の実相を伝え、核兵器のない平和な世界の実現に貢献するために昭和30年（1955年）に開設されました。本資料館は、「導入展示」、「核兵器の危険性」、「広島のみち」の3つのゾーンに分けて展示している東館と被爆の実相を「8月6日の惨状」と「被爆者」の2つのゾーンに分けて展示している本館の二つの建物からなります。

本館で目を引いたのは原爆投下前後の広島市内の様子をプロジェクションマッピングで見ることのできる展示で、原爆が落とされて、一瞬で美しい広島街が焼け野原になってしまった様子を見ることができます。亡くなった人が約14万人もいたことを知り、それだけ多くの人々が亡くなられた上、被爆されて今も苦労されている方々も多くいらっしゃることを知りました。そのほか、8月6日の原爆投下以後の惨状の展示がされており、原爆で負傷した痛々しい姿の少女や人影が残る石など、被爆の実相を伝える展示が続きます。



平和資料館を見学する団員

(2) 訪問2日目・8月6日(水)

- 8:00 原爆死没者慰霊式並びに
平和祈念式参列
- 10:00 被爆者体験談の聴講
- 14:30 平和記念公園内の碑めぐり
- 20:30 とうろう流し



それぞれの平和への思いを灯籠に込めた

げんぼくしぼつしゃいれいしきなら へいわきねんしき 原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式

毎年8月6日に、被爆者、政府、自治体関係者など、国内外から多くの人々が参列し、原爆死没者の冥福と恒久の平和を願って行われています。

午前8時に開会し、松井一實広島市長と遺族代表が、原爆死没者名簿を原爆慰霊碑に納めました。

この1年間に新たに亡くなったり、死亡が確認されたりした被爆者は4,940名。名簿搭載者の総数は34万9,246名に、名簿の数は130冊となりました。原爆が投下された午前8時15分、全員で黙とうし、死没者への心からの哀悼と不戦の誓いを新たにしました。訪問団は、初めて参列する式典の、テレビを通して見る様子とは異なる厳粛な雰囲気緊張しながら、参列する多くの被爆者及び遺族とともに黙とうを捧げました。

黙とう後、松井一實広島市長から、世界に向けて市民の平和への願いを込めた「平和宣言」が発信されました。

松井市長は平和宣言で、80年前の当時の被爆者の訴えやNRT(核兵器不拡散条約)、ノーベル平和賞を受賞した日本原水爆被害者団体協議会に触れ、各国に「世界中に「平和文化」を共有できる世界を創っていきましょう。」と呼びかけるとともに、「広島を訪れ、この地で感じたことを心に留め、幅広い年代の人たちと友好の輪を創り、今自分たちにできることは何かを考え、共に行動し、希望の輪を広げていただきたい。」と述べました。

子どもたちは、出席者の挨拶や同年代であることも代表の誓いの言葉に真剣な表情で耳を傾け、平和への思いと、この貴重な経験を心に刻みました。

げんぱくしほつしゃいれいひ 原爆死没者慰霊碑

平和記念公園の中央に位置する、古墳時代の
家形埴輪に似たデザインの碑で、中央の石室に
は原爆死没者名簿が納められています。碑の正
面には、「安らかに眠ってください 過ちは繰り返
しませぬから」という言葉が刻み込まれていま
す。この碑文には主語がありません。人類の誓い
であるからです。



原爆死没者慰霊碑

この静かで短い言葉には、原爆死没者への哀悼と、戦争という過ちを二度と繰
り返さないという平和への願いと誓いが込められており、見る者の心を打ちま
す。原爆が投下された事実、また核兵器のない世界を実現する為に、みんなで語り継
ぎ平和を訴え続けていきたいと思いました。

平和の灯

昭和39年(1964年)8月1日建立。当時、東京大学の教授だった丹下健三氏
の設計により、全国12宗派から寄せられた「宗教の火」や溶鉱炉などの全国の工
場地帯から届けられた「産業の火」が、昭和20年(1945年)8月6日生まれの
7名の女性により点火されました。

建立の目的は「水を求めてやまなかった犠牲者を慰め、核兵器廃絶と世界恒久平
和を希求するため」。この火は、点火された日以来ずっと燃え続けており、「核兵器が
地球から姿を消す日まで燃やし続けよう」という反核の象徴です。

本市では、平成21年8月6日に、平和の象徴として、市役所本庁舎玄関横に
「平和の灯モニュメント」を設置しました。同年の親子ひろしま訪問団がこの「平和の
灯」から採火し持ち帰った火が、燃え続けています。

ひばく 被爆したアオギリ

爆心地から約1.5キロメートル離れた東白島町にあった当時の広島
逓信局の中庭に、3本のアオギリの木が植えられていました。

原爆の投下によって、熱線と爆風をまともに受けた3本のアオギリは、枝葉が
全て無くなり、爆心地側の幹の半分が焼け焦げました。

しかし、枯れ木同然だったアオギリは翌年の春、奇跡的に新芽を出し、その

すがた げんばく ひへい あた
姿は、原爆投下と敗戦によって疲弊した人々の心に、生きる勇気と希望を与えました。

昭和48年（1973年）、当時の中国郵政局（かつての通信局）の建替えに伴い、平和記念公園内の現在の場所に移植されました。3本のうち1本は枯れてしまいましたが、この被爆したアオギリの種子は国内外に贈られ、「被爆アオギリ2世」として大切に育てられています。

今年度は平和首長会議から被爆アオギリ2世の苗木の受け取り、親子ひろしま訪問団の団員が通学する小中学校で植樹を行います。

被爆体験談聴講

平和記念式典参列後、講師の増岡清七氏から被爆体験のお話を伺いました。増岡氏は、被爆当時の状況やその時の恐怖について子どもたちにも分かるよう丁寧に話し、その言葉は、戦争そして原爆の恐ろしさ、平和の大切さを訪問団に静かにしかし強く訴えかけました。

【被爆体験談（増岡清七氏のお話から抜粋）】

昭和20年（1945年）8月6日は、建物疎開作業のため、約8,300名の中学生が作業をしていた。学徒動員令により当時の中学生は、夏休みもなく工場等で作業や建物疎開に従事することになっていた。

建物疎開とは、空襲による火災の延焼を防ぎ、住民の避難場所のために建物を壊し、空き地をつくることで、当時、県庁や

市庁舎周辺は建物疎開で空き地となっていた。当日、増岡氏を含む3年生の半数の70名は、爆心地から約1キロメートルの場所で、引率の先生の話聞いていた。

午前8時15分、突然、強い光が目に入り、左からの風で押し上げられ、地面にたたきつけられた。そのまま意識を失い、原爆特有の「ピカ（光）ドン（音）・きのこ雲」の記憶はなかった。

意識が戻り、見渡すと夜のように真っ暗な中、空から火が降って見え、悲惨な

増岡清七氏（広島市在住）



爆心地から約1kmで被爆。当時中学3年生。

戦後、高校で教鞭をとっていたが、退職後、「被爆語り部」として、反核・平和を訴え続けている。

状況が広がっていた。原爆が落ちたと知ったのは後のことだった。

生き残った学友たちを見ると、みんな皮膚が垂れ下がり、一見誰だか分からないほどの形相だった。熱で剥がれた皮膚は、爪のところで止まり、とぐろを巻くように垂れ下がっていた。

増岡氏も左顔面や腕など皮膚が垂れ下がり、今もその痕が残る。何が起こったのか、どこが安全なのかも分からないまま、爆心地から市外へ必死で逃げた。炎に焼かれ、死に逝く人たちを見ながら、とにかく「死にたくない」一心で逃げた。「生きたい」ではなく「死にたくない」という気持ちで。「生きたい」には希望があるが、「死にたくない」は絶望の中で感じること。広島市の市街が炎で燃え上がっている中「死にたくない」とたどり着いた防空壕には、人が重なり合い、あふれていた。



被爆体験談聴講

ひん死の状態、水や家族を求めていた。木陰でそのまま眠ってしまったところを翌日、救助隊の馬車で市外の民家の座敷に運ばれた。既に多くの人丸太のように横たわっていた。この時、初めて汚い布で患部を拭いたが、治療はされなかった。

翌日、汚い茶碗によそわれたお粥が1杯置かれたが、皮膚のうみで左目と口が開かず、食べるのに困った。皮膚が垂れ下がった左顔面や腕に太陽の光が当たると、針でチクチク刺されるような痛みが続いた。数日後、行方を必死で探してくれた父親と再会し、荷車に乗せられ親戚宅に行った。

その時は、増岡氏の体を気遣って教えられなかったが、自宅は全壊、母親は即死していたと、後に父親から伝えられた。療養のための旅行で留守にして死を免れた父親も翌年、増岡氏が15歳のときに亡くなった。恐らく、増岡氏が行方を探すために原爆投下直後の広島市の街を歩いて回る中で、残留放射能を浴びてしまったためと思われる（入市被爆）。火葬する設備がなく、自分自身でだびに付した。既に兄は特攻隊員として沖縄で戦死しており、家族は姉と二人きりになってしまった。

学友たちも多くが原爆により亡くなったが、そのうちの一人の遺品が、平和記念資料館に展示されている。



増岡氏と一緒に昼食

ひばくたいけんちょうこう
被爆体験聴講後、増岡氏と一緒に食事をとりま
した。その間も子どもたちは増岡氏に質問をした
り、熱心に話を聞いていました。

げんばく 原爆ドーム

後に「原爆ドーム」と呼ばれるこの建物は、大正4年（1915年）に広島県
の物産品の販売促進を図る拠点として建設され、建設当時は「広島県物産陳列館
」という名称でした。その後、「広島県産業奨励館」と改称されましたが、
県内の物産品の展示・販売を行うほか、博物館、美術館としての役割も担ってい
ました。

しかし、戦争が激しくなった昭和19年（1944年）3月、産業奨励館と
しての業務が廃止され、内務省中国・四国土木出張所や広島県地方材木・日本
材木広島支社など統制会社の事務所として使用されていました。

設計者はチェコの建築家ヤン・レツル氏で、構造は一部鉄骨を使用したレンガ
造り、石材とモルタルで外装が施されていました。全体は3階建てで、正面中
央部分に5階建ての階段室、その上に銅板の楕円形ドームが載っていました。

爆心地から約200メートルの場所に位置し、原爆投下により爆風と熱線を浴
びて大破し、天井から火を吹いて全焼しました。爆風がほとんど垂直に働いた
ため、本館中心部は奇跡的に倒壊を逃れたものの、館内にいた全ての人々は即死
しています。

鉄骨部分がむき出しの残骸と化し、いつか
らともなく「原爆ドーム」と呼ばれ、平成8年
（1996年）に世界遺産へ登録されました。

静かにたたく原爆ドームの姿は、平和記
念資料館で原爆に関する様々な資料を見た訪問
団に、同じような悲劇を繰り返してはいけない
と改めて強く感じさせられました。



平和そして核兵器廃絶の象徴である原爆ドーム

平和記念公園内の碑めぐり

平和記念公園^{およ}及びその周辺には、原爆犠牲者^{げんばくぎせいしや}の慰霊碑^{いれいひ}など50を超える原爆関連^{げんぱく}の記念碑^ひや記念建造物^{けんきんけんぞうぶつ}があります。訪問団員^{もうしよ}は猛暑^{もうしょ}の中、それらのいくつかをじっくり見学し、戦争^{せんそう}や原爆^{げんぱく}の恐ろしさを実感^{じっかん}しました。



ガイドの説明に聞き入る団員たち

被爆した墓石（慈仙寺跡の墓石）

当時^{たうじ}、太田川^{おおたがわ}が元安川^{もとやすかわ}と本川に分かれるあたりは「慈仙寺の鼻」と呼ばれていましたが、それはここに慈仙寺^{じせんじ}という浄土宗^{じょうどしゅう}の大きなお寺があったからです。その慈仙寺は爆心地から約200mで、全ての建物^{かいめつ}は壊滅^{かいめつ}、住職^{じゅうしやく}ほか2名は清掃中に即死、浴室で洗濯中の住職の妻も重傷で翌日死亡し、結局全員が亡くなりました。

また、当時慈仙寺は中島国民^{こくみん}学校の分教場^{ぶんきょうじょう}として利用され、通学していた十数人の低学年の児童も犠牲になりました。平和記念公園の中で、被爆当時の地面をそのままとどめているのは、この墓地だけです。公園が盛り土して建設されたため、周囲を石で囲んで、池の底のようになってしまったこの部分が当時の地面です。



被爆した墓石

(参考：『碑めぐり解説のしおり』被爆体験証言者交流の集い 編 広島平和記念資料館啓発課)

げんばくくようとう 原爆供養塔

ばくしんち 爆心地に近いこの付近には、ひばく 被爆後、いたい さんらん 遺体が散乱し、また、川から引き上げられたものなど、無数のいたい 遺体が運ばれ、だびに付されました。

昭和21年（1946年）、市民からの寄附により、かりくようとう 仮供養塔、かりのうこつどう 仮納骨堂、れい 拝堂が建立され、その後、昭和30年（1955年）に、広島市が中心となり、ろうきゅうか 老朽化したのうこつどう 納骨堂を改築し、各所にさんざい 散在していた引き取り手のないいこつ 遺骨もここに集め納めました。身内の見つからないいこつ 遺骨や氏名の判明しないいこつ 遺骨約7万柱が納められています。

毎年8月6日には、様々なしゅうきょう 宗教及びしゅうは 宗派合同のくよういれいさい 供養慰霊祭が営まれています。



原爆供養塔

かんこくじんげんばくぎせいしゃいれいひ 韓国人原爆犠牲者慰霊碑

終戦時、日本には約300万人のちょうせんじん 朝鮮人がおり、数万人が広島市内でひばく 被爆したといわれています。

「死者のれい 霊はかめ 亀の背に乗ってしょうてん 昇天する」という故事にならって、かめ 形取ったたいざ 台座の上にひちゅう 碑柱が建ち、その上に二つのりゅう きざ 竜を刻んだかんむり 冠が載せられています。

ひ 碑は、当初、軍人であったちょうせん 朝鮮王家の一族り でんか 李殿下がしゅっきんとちゅう 出勤途中にげんばく 原爆投下にあ 遭い、その後発見された場所付近ということから、ほんかわばしにしづ 本川橋西詰めにこんりゅう 建立されました。

その後、各方面からの強い要望により、平成11年（1999年）7月に平和記念公園内に移設されました。いれいひ 慰霊碑の石は、国に帰れなかった人々への思いから、ふるさとかんこく 韓国の石が使われています。

令和5年（2023年）5月には韓国のゆんそんによる 尹錫悦大統領が岸田総理とともにいれいひ 慰霊碑にけんか 献花を行いました。



韓国人原爆犠牲者慰霊碑

どういんがくといれいとう 動員学徒慰霊塔

だいにじせかいたいせんちゅう ろうどうりよく ふそく おぎなう きんろう
第二次世界大戦中、労働力の不足を補うため、勤労
ほうし どういん せんか がくと げんぱく ぎせいしゃ ふく
奉仕に動員され戦禍にたおれた学徒と、原爆の犠牲者を含め
た約1万人の学徒の霊を慰めるため建立されました。

めがみぞう
平和の女神像と8羽のハトを配した高さ12mの有田焼の
ありたやき
とうばん
陶板仕上げで、末広りの5層の塔の中心柱に慰霊の灯明
とうみょう
がついている。塔の左右にある4枚のレリーフは「食糧増産
ほうせい
作業」「女子生徒の縫製作業」「工場内での鉄工作业」「広
てっこう
島の灯ろう流し」を表し、その裏に全国戦没学徒出身校35
1校の校名と動員学徒悼歌“ほのお果てては”が記されてい
ます。

(参考：『碑めぐり解説のしおり』被爆体験証言者交流の
集い 編 広島平和記念資料館啓発課)



動員学徒慰霊塔

かね 平和の鐘

かくへいき
核兵器と戦争の無い平和な世界の達成を目指し、その精神文化運動のシンボルとし
て建立されました。この鐘の音を広島から世界の隅々まで響き渡らせ、全人類の一
かね すみずみ ひび わた
人ひとりの心にしみわたらせることを願い、訪問者が自由に鐘を鳴らせるようになって
います。

かね ぼんしょう じゅうようむけいぶんかざいほじしゃ にんげんこくほう かとりまさひこ
鐘は、梵鐘の分野で重要無形文化財保持者（人間国宝）である香取正彦氏が制
しょうちよう
作し、表面には「世界は一つ」を象徴する国境の無い世界地図が浮き彫りにされ
う ぼ
ています。

つきざ げんすいぼく こ
撞座は、原水爆禁止の思いを込めて原子力
のマークがデザインされており、鐘楼の周囲
しょうろう
の池には大賀ハスが植えられています。

ひばく きず おお
被爆当時、ハスの葉で傷を覆い、やけどの
いた ひばくしゃ れい なぐさ
痛みをしのいだという被爆者の霊を慰めたも
のです。



平和への思いを込め、鐘を突く団員

とうろう流し

げんぱく いっしゆん うば
原爆は一瞬にして多くの命を奪いまし
た。そして、そくし まぬか
即死を免れてもひどいやけどを
負った人たちが大勢いました。その人たちの
多くは、その熱さと痛みに耐えかねて近くの
川に次々に身を投げ、川面にはいたたい う
遺体が浮き、
川底にもいたたい しず
遺体が沈んでいたといひます。

戦後、駅前を中心にヤミ市がにぎわい、中
心部にバラック建ての商店が建ち始めた昭和

23～24年頃、げんぱく いぞく ついぜん くよう
親族や知人を原爆で失った遺族や市民たちが追善と供養のため、
とうろう
手作りの灯籠を川に流したのが、「とうろう流し」の始まりとされています。

とうろう
灯籠には、な
亡くなった方の名前と流した人の名前をか こ
書き込むのが一般的ですが、
最近「平和への思い」が書かれる光景も目立ちます。長い歴史を持つ「とうろう流
し」は、いれい
慰霊とピースメッセージの両方の意味を持つようになりました。毎年8月6
日ゆうこく もとやすばし
の夕刻に元安橋の上流から流されています。

コロナ禍のため中止されていた自分で川に流すことが再開し、広島訪問2日目を終
えた訪問団10名は、しせつ
平和施設見学や平和記念式典出席を経て感じたそれぞれの平和
への思いをこ
込めてとうろう
灯籠を流しました。



元安川を彩る灯籠

(3) 訪問3日目・8月7日(木)

- 9:00 広島駅発
- 10:00 世界遺産 いつくしまじんじゃ 「厳島神社」見学
- 17:03 広島駅発
- 20:38 小田原駅着・解散



世界遺産・宮島「厳島神社」を見学

世界遺産「厳島神社」・日本三景「宮島」見学の様子



4 訪問団員（参加者）の声

(1) 訪問前の感想

ア 親の声

●ロシアによるウクライナ侵攻しんこうのニュースを見て、息子が疑問ぎもんに思ったことなどを尋ねてくるようになりました。これまで、親子で戦争や平和について話をしたことはなく、どのように答えればいいのか考えてみましたが、親として、何が正しい情報なのか、何を伝えていくべきなのか、答えを持ち合わせていないと感じています。

これから息子は戦争や平和について様々な場面で学んでいくことになります。学校の授業だけでなく、インターネットや SNS から情報を得ることもできますが、まずは自分で実際に見たもの、感じたことを大切にしてほしいと思うようになりました。今回の訪問で被爆者の方の体験談を聞いたり原爆ドームを見たりすることで、「戦争」があったことを自分の目で感じて、「平和」について一緒に考えるきっかけにしたいと考えています。

日本で暮らしていると、「平和」であることが当たり前で、過去に戦争があったこと、世界では今でも戦争が起きていることを実感することはありません。今回の訪問で、子どもにはショッキングなこともあるかと思いますが、親として子どもと向き合って考え、話す機会にしたいです。

●「親子ひろしま訪問団」行った友人が参加して良かったと言う話を聞き、戦後 80 年の節目ふしめに、親子で平和や戦争について考える機会になればと思い応募しました。

私自身、終戦の時期が来るたび、ドキュメント番組や映画等で当時の悲惨ひさんな状況を映像を通してしか知る事はありませんでした。今回、実際に広島を訪れ、被爆された方から直接お話を聞いたり、原爆ドームや資料館等を自分の目で見て、触れ、体験したりすることで、平和や戦争について自分の言葉で次の世代に伝え、繋げることができるのではないかと考えています。

●日本や世界の歴史の漫画を読み続けている子どもの姿を見て、一緒に参加したいと思いました。子どもも私自身も、遺品などを目にし、被爆者のお話を伺うことで、戦争が何をもたらすのか、心で感じるものがあるのではないかと考えています。

約 20 年前に欧州の強制収容所跡きょうせいしゅうようじょあとを訪ねた時に感じたことは、その後の物事の見方や判断に影響を及ぼしてきました。広島で感じることも、きっと同じように影響を及

ぼしていくに違いない。たとえそれらのほとんどが日常的な場面でのことであり、個人的なことであっても、それにより、自分の周りで起こることにも何かしらの違いが生み出されていけば……。そんな思いを胸に、広島へ向かいます。そして今の広島を、この訪問団への参加を機に子どもと読んだ「はだしのゲン」に重ねて見てみたいとも思っています。

●広島市民は、式典しきてんに参加するのが当たり前で、小さい頃から式典に参加し、原爆投下の時刻に合わせて黙祷するのが当たり前と、広島市出身の方に聞いたことがありました。平和で当たり前のように日常生活を送れている昨今ですが、世界ではまだ戦争が行われていて、今、あたり前の日常生活を送れているのも、日本にも過去に悲しい出来事があったことを再認識し、また、感謝しながら、戦争について知り、また、平和であることのありがたみを知ってもらいたいと思い、今回参加しました。

●戦争の悲惨さ、平和の大切さを忘れないように、毎年ピースキャンドルナイトに参加したり、千羽鶴を折って秦野市に届ける活動をしたりしてきました。今年はもう一步踏み込んで平和学習について学んでみたいと思い、親子ひろしま訪問団に申し込みをさせて頂きました。

私は秦野市で教員を務めています。小中学校で平和学習に取り組んできて5年が経過したところです。生徒が折った千羽鶴を原爆の子の像に届けることや増岡清七さんの被爆体験の話、平和式典への参加、とうろう流しなど貴重な体験を通して平和への考え方を深めていきたいと思っています。そしてこの経験を生かし、令和を生きる子どもたちに平和の大切さを伝えていきたいです。

イ 子どもの声

●5年生のときに、初めて広島に落ちた原爆について社会の授業で知って、もっと詳しく知りたいと思うようになりました。それから、戦争について書いてあるマンガの「はだしのゲン」が学校の図書館にあったので、読んでみました。「はだしのゲン」を読んで、戦争のこと、原爆、そして平和について知り、深く考えて、そして、今ぼくたちがどれほど幸せかを感じるきっかけになりました。「はだしのゲン」はマンガだけど、原爆が落ちた日に本当にどんなことがあったのかを知りたくて、親子広島訪問団に参加しようと思いました。

広島に行くのは初めてなので、いろいろなものを見たり、経験したりして、平和の尊さについて、たくさん知ることができると期待しています。

それと、被ばく者の方から、原爆が落ちた日に何があったのか、原爆が落ちたあと、そこにいた人々は何をしていたのか聞いてみたいです。

●私は「この世界の片隅に」という戦時中の広島を舞台にした映画を観ました。食べ物などが少なくなっても、工夫して料理を作ったりする主人公のすずさんの日常が描かれています。原爆が落ちて広島街が何もなくなってしまうところも描かれています。お母さんから親子ひろしま訪問団の話聞いたときは、行きたい気持ちと実際に見ることになる怖さで行きたくないと思いましたが、お父さんが「本当に怖いことは、本当を知ろうとしないことだよ」と教えられました。今回の広島訪問で、本当にあったことを自分の目で見てみたいと思います。

●第二次世界大戦のことは日本の歴史の漫画を読んで知っていました。今回の親子ひろしま訪問団に参加するに当たって、「はだしのゲン」を図書館から借りて読んでみました。暴力的な表現や描写が含まれていましたし、食料が足りず困っている描写もあり、すごく大変そうでした。そして、想像している以上に原爆が恐ろしいものだということが分かりました。原爆の恐ろしさをこの訪問でしっかり学んでいきたいと思えます。

少し話題は変わりますが、広島市には広島電鉄という路面電車が走っています。その中でも、全国的に有名な被爆電車156・651・652・653号車は被爆した後、修復を受け、今でも走っています。これらの車両は朝ラッシュの時間帯しか走っ

ていないので、見られるといいな……。

●祖父の2人の兄弟が15～18才の頃、戦争(海軍)でなくなったと聞いた事があったので、身近な存在の人を戦争でなくなった話をきいたので、自分の目で聞いて、戦争のことを理解しながら、戦争に参加した人、その家族はどんな思いをして送り出したのか聞いてみたいと思ったからです。

●学校の国語の授業で「一つの花」「ちいちゃんのかげおくり」という戦争教材を学習しました。自分達は、安心して生きていているけれども、世界では、生きて居られないということがあります。戦争やご飯が食べられない国もあります。戦争がどれだけ怖い、恐ろしいかしっかりとわかるために応募しました。

(2) 訪問後の感想

ア 保護者の声

●被爆体験をお話いただいた増岡さんの言葉で、「平和教育とは一人ひとりの命を大切にすること」というフレーズが心に残っています。「平和」について考えるとき、国の問題であって、私たちにできることなどないのではないかと思いがちです。しかし、今回の訪問を通して、自分の家族や周りの人を大切にすること、共に生きる人たちの命を大切にすることが、私たちにできることで、その輪が隙間なく世界に広がっていけば「平和」を構築^{こうちく}することができると感じました。

8月6日の広島では、たくさんの方が平和を世界に広げるために働いていました。ご自身の辛い経験を伝えてくださっている被爆者の方、平和記念公園を案内して下さったガイドの方や平和記念式典の運営のために朝早くから集まっていたボランティアの方など、様々な方の思いに支えられて子どもたちが「平和」について学ぶ機会を得ることができました。関わっているすべての方に感謝すること、そして自分の周りにいる人たちの命を大切にすることを子どもに教えていきたいと思えます。

●今回このような機縁をいただき、友人や親族に「ひろしま訪問団」の話をしたところ、8月6日平和式典の様子を初めて最後まで観て8時15分には子どもたち家族^{もくどう}で黙禱をし、平和について考えた連絡をもらいました。私たちが式典に参加したというだけで、14人の仲間たちに広がったという思いがしました。一人の行動や発言は小さくても、周りに広がり、やがて大きな輪が平和に繋がっていくことを経験することができました。今回、被爆された増岡さんから^{ことづて}言伝を預かったと思っています。次の世代に語り繋いでいきたいと思えます。

●以前は、子どもが広島電鉄のミニカーを持っていたても、わたし自身はそれが被爆電車であることを知りませんでした。本人に聞いてみたところ、このミニカーで被爆という言葉を知ったそうです。鉄道が好きな子どもは、そういうものが広島や原爆、ひいては戦争というものを知る入口になり得るのかと、目から鱗^{うろこ}でした。実際に被爆電車が走っているのを見ることも叶い、広島から帰るわたしのバッグの中には、そのミニカーがありました。これを見せて語りかけたい子どもたちがいます。

また、PTAのクラブでは絵本の読み聞かせをして新聞も発行していますが、その新聞の9月号で、戦争と平和に思いを巡らせる絵本2冊の紹介を担当させていただくことにしました。

約20年前の強制収容所跡訪問^{きょうせいしゅうようじょあと}では、自分の中に思いを抱くだけで、たまたま友人知人との

話題に出た時に自分が感じたことを話す程度でした。年を重ね、この訪問団でたくさんの見学、^{ちょうこう}聴講、質問をさせていただいたことが、自分の活動の中で発信していきたい思いに繋がりました。

被爆体験談を聞かせてくださった増岡さんの言葉に「平和教育の原点は、一人一人の人間の命を大切にすること」というものがあり、そこから派生して「人間が人間としての思いを広げていくこと」という言葉もありましたが、それを聞いて、わたしにもできることがあると思えました。

●被爆者体験を語れる方もだんだんと高齢化し、実際これから先どれだけの人が語り継ぎ、そして、そのお話しを聞ける機会があるかどうか分からない昨今だという危機感を覚えました。

体験談を実際に体験できたことに感謝しつつ、まずは自分の子どもと平和について、当たり前暮らしている生活はどうしてなのか。等を話し合い、子ども自身に自分の当たり前の幸せ、何でも手に入れられる時代なのは、^{せんじんたち}先人達の多くの犠牲の命があつてこそということを忘れず、子ども達に命の尊さを教え、平和のありがたさに感謝する心や^{しぎ}視座を高めていきたいと思いました。

●平和教育への想いは、何度もあたため直すことが重要だと考えられます。人間なので一度聞いたことはそのとき覚えていても時間と共に忘れてしまいます。平和教育も同じで、一度実施したから良しとするのではなく、年に一度実施するなどの継続性が必要だと思いました。広島ではそれが原爆の日であると思います。今私たちが住んでいる秦野市でも毎年平和教育に触れる機会があった方が良く思いました。その点でいえばピースキャンドルナイトは毎年平和について考えられる機会にあたるのでとても良いと思います。

私は教員生活で毎年関わる子どもたちに平和教育を実施してきました。今回の親子ひろしま訪問団に参加したことで、より平和教育を継続していこうと思えました。平和記念式典に参加したこと、原爆の被害に合われた方の話を聞いたこと、ボランティアの方が原爆の被害を語ってくれたことなど貴重な体験をさせて頂きました。

秦野市役所の前では平和の灯がずっと消えずに燃えています。秦野市民の方々の平和への想いが平和の灯と同じようにずっと消えないように、平和の尊さを語り続けていきたいと思いました。

イ 子どもの声

●今回の訪問で経験したことを学校の中で広めて、みんなといっしょに平和について考えることをしたいと感じました。そして、生活の中でも平和について考えることが大切だと思います。

今の生活が当たりまえのように思っていますが、この生活が当たりまえではないことに気づきました。これまで今の生活が当たりまえで、他の国々も同じような生活なんだろうと思っていました。しかし、ニュースを見てそうではないことを知りました。あまりゆうふくではない国で暮らす人たちや、戦争や内紛があつて、本当は行きたくないのに戦場に借りだされている人など、みんながぼくたちと同じではなく、平和が当たりまえではないと思いました。

平和記念資料館で、死んでしまった12歳の男の子の服が飾ってありました。被爆者の増岡さんも、中学2年生から工場で働いていたと話をしていました。戦争になったら、ぼくと同じ年齢でも働いたりしなければいけないと思うと、あらためて平和を大切にしなければいけないことをこの訪問で感じました。

●今回の広島訪問で平和の尊さ命の大切さを知りました。被爆者の増岡さんのお話を友達や身近な人に語り平和について考えるきっかけを作りたいと思います。

●今まで、平和について考えたことは少ししかありませんでした。しかし今回の訪問で様々な体験がありました。平和記念資料館には、被爆した方の所持品や衣服、熱線で曲がった鉄骨の他、たくさんの写真がありました。特に僕の印象に残ったものは、建物の一部の石です。原爆が投下された時に人が座っていたそうです。その人は即死しました。座っていた石は、熱線と放射能で黒から白に変色しました。しかし、人が座っていた場所は熱線などに触れず元ののままです。原爆一つで一瞬にして人の命と日常が奪われる。これはこれ以上ないくらいひどいことだと思います。写真の方には、ひどい火傷をした人のものなどがありました。これらの展示物を見て、平和というものがとても大切だということが分かりました。

また、広島電鉄には被爆電車と呼ばれる車両が4両あります。是非見てみたかったので、この訪問で運よく651号と652号が見られてよかったです。

651号については、被爆3日後の写真を見たことがあります。真っ黒に焼け焦げて屋根の部品が外れていました。車両の修復は1946年に終わりましたが、とても大変だっただろうと思います。きっと社員の人は、広島 みんなを運びたいという思いで復旧させたのでしょう。最初は漫画などを通してしか知っていませんでしたが、今回はより人の思いがこもった形で学ぶことができました。

これから、学校 みんなに今回の経験を色々と話そうと思います。そして、クラス全体で平和について話し合うきっかけになればいいと思います。

●被爆体験者のお話を聞ける貴重な体験ができました。そのお話しの中で、戦争がどれだけ激しかったのかを知り、とても悲しい気持ちになりました。戦争の知らないお友達に、戦争は一瞬にして、家族・家・町・自分の大切にしている、ありとあらゆる物など全てを奪い取ってしまうということ。その結果、失った悲しみをずっと心にかかえて生きている人がいたということ伝えていきたいです。

そして、戦争の知らない人達にも、戦争の悲惨さを親から子ども、子どもからまたその子どもと、繰り返し繰り返し語りつぐことが大切だと思うので、世界が平和であることを願い、自分ができる活動をしていきたいと思いました。

●今回の親子ひろしま訪問団で1番印象に残っていることは、灯籠流しです。灯籠流しとは、原爆、戦争で被害にあった人の霊を慰めるとともに、世界の平和を祈り、灯籠を川に流します。なぜ印象に残ったかという灯籠流しは小学4年の私でもわかりやすいイベントだからです。そして戦争の事と、平和の願いの事が同時に分かるからです。戦争で傷ついた人への慰めとこれからの平和の願いを和紙に書いて作ります。実際に川に流れる多くの灯籠を見たとき、夜の中に光るみんなの願いがとてもきれいでした。思っていたより灯籠流しに参加する人の数が多く、嬉しかったし、きっとみんなの想いが届くと思いました。私はこの経験をまだ知らない友だちに伝えたいです。今日本では戦争が起こってはいないけど、他の国では起こっていること。その起こっている事実と灯籠流しの美しさをいろんな人に届けていきたいです。

5 訪問団規約

(名称)

第1条 この訪問団の名称は、親子ひろしま訪問団（以下「訪問団」という。）という。

(目的)

第2条 訪問団は、原爆被災地である広島を訪問し、団員自らがその目で戦争の悲惨さを見ることにより、平和の尊さを学ぶことを目的とする。

(事業)

第3条 訪問団は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 原爆ドーム等を視察することにより、原子爆弾を始めとした戦争兵器使用による殺りくの悲惨さを学ぶ。
- (2) 平和祈念式典に参加することにより、無意味な戦争の否定を決意するとともに、恒久の平和の追求を決意する。
- (3) 原子爆弾が投下され、壊滅的な被害を受けながらも希望を持って築きあげられた今日の広島市等を視察することにより、平和の尊さ及び不屈の努力の成果を学ぶ。
- (4) その他目的を達成するために必要な事業。

(組織)

第4条 訪問団は、公募等の方法による希望者から選ばれ構成される親子5組10人により組織する。

- 2 訪問団に、団長、副団長、会計、監事及び記録を置き、それぞれ訪問団員の互選により定めるものとする。
- 3 団長は、訪問団の事業を総理し、訪問団を代表するものとする。
- 4 副団長は、団長を補佐し、団長に事故あるとき又は欠けたときは、その職務を代行するものとする。
- 5 記録は、訪問団の事業を記録するものとする。
- 6 会計は、訪問団の経理を処理するものとする。
- 7 監事は、会計を監査するものとする。
- 8 訪問団の事務局は、秦野市役所平和主管課に置く。

(解散)

第5条 訪問団は、第2条の目的を達成したときに解散するものとする。

(経費)

第6条 訪問団の経費は、訪問団員の自己負担金、市からの補助金、その他の収入をもって充てる。

(その他)

第7条 この規約に定めるもののほか、訪問団の運営に関して必要な事項は、団長が定めるものとする。

附 則

この規約は、平成7年6月15日から施行する。

この規約は、平成28年4月1日から施行する。

この規約は、平成31年4月1日から施行する。

II はだの平和の日のつどい

訪問を終え、秦野の地へ帰った親子ひろしま訪問団は、8月16日（土）にメタックス体育館はだの（総合体育館）サブアリーナにて「平和の日事業」として開催された「はだの平和の日のつどい」で、来場した120名を超える観客を前に訪問の活動報告を行いました。彼らが肌で感じ、学んできた、その生の声は、会場の市民の心にも深く刻まれました。



質疑応答では、市長から一番印象に残ったことは何か、と子どもたちに質問しました。子どもたちは、平和記念資料館の見学で、戦争の恐ろしさ、残酷さを学べたことやあんなに大きな原爆ドームが原子爆弾でボロボロになり、思っているより原子爆弾が恐ろしいものだと感じたと話しました。

また実行委員長からは参加前と参加後のお子さんの変化について質問しました。親御さんは、お子さんの変化については、戦争に対する質問がとても増えたが、うまく説明できない部分やうまく伝わらない部分がある。対話をしながら続けていくことが大事なので、これからも語り合っていきたいとお話いただきました。

なお、今年度の「はだの平和のつどい」では、戦後80年被爆体験講話、公募市民2団体によるコンサートも行われました。

III 被爆アオギリ二世の植樹

9月には訪問時に受け取った被爆アオギリ二世の苗木を団員が通学する学校に植樹しました。その際、団員から活動報告や被爆アオギリ二世について、クラスの友達や学年児童生徒などに発表しました。この活動を通して、より多くの人に平和や命の大切さを伝えることができました。



IV 資料

1 秦野市の市民憲章・平和都市宣言・平和の日制定文

◎秦野市民憲章

わたくしたち秦野市民は、丹沢の美しい自然のもとで、このまちの限りない発展に願いをこめ、ここに市民憲章を定めます。

- 1 平和を愛する市民のまち、それは私たちの誇りです。
- 1 きれいな水とすがすがしい空気、それは私たちのいのちです。
- 1 健康ではたらき若さあふれるまち、それは私たちのねがいです。
- 1 市民のための豊かな文化、それは私たちののぞみです。
- 1 みんなの発言で住みよいまちを、それは私たちのちかいです。

この市民憲章は、秦野市の発展を願って昭和44年10月1日に制定したものです。

◎秦野市平和都市宣言

私たち秦野市民は、平和への限りない願いをこめて「平和を愛する市民のまち、それは私たちの誇りです。」と市民憲章に定めた。

私たちの責務は、この精神にのっとり永遠の平和を希求し、愛する郷土を守り次代へ引き継いでいくことである。

しかし、武力紛争は世界各地で絶え間なく続き、際限のない軍備拡大と核兵器の増強は、人類の生存に深刻な脅威を与えている。

世界の恒久平和は、すべての人々の切なる願いである。私たち秦野市民は、国際平和年に当たり非核三原則を堅持するとともに、永久の平和とあらゆる国のあらゆる核兵器の廃絶を願い、ここに「平和都市」を宣言する。

昭和61年3月27日制定

◎秦野市平和の日制定について

私たち秦野市民は、永遠の平和を希求し、愛する郷土を守り引き継いでいく精神をうたった秦野市民憲章と秦野市平和都市宣言の理念の下に、一人ひとりがそれぞれの信条や立場を越えて、平和についてともに考え、語り合うことにより、平和への願いを未来に向け継承していくため、ここに「秦野市平和の日」を制定します。

秦野市平和の日 毎年8月15日

平成20年6月9日制定

2 広島市平和宣言

今から80年前、男女の区別もつかぬ遺体であふれかえっていたこの広島市の街で、体中にガラスの破片が突き刺さる傷を負いながらも、自らの手により父を茶毘に付した被爆者がいました。「死んでもいいから水を飲ませて下さい！」と声を振り絞る少女に水をあげなかったことを悔やみ、核兵器廃絶を叫び続けることが原爆犠牲者へのせめてもの償いだと自分に言い聞かせる被爆者。原爆に遭っていることを理由に相手の親から結婚を反対され、独身のまま生涯を終えた被爆者もいました。

そして核兵器のない平和な世界を創るためには、たとえ自分の意見と反対の人がいてもまずは話をしてみることが大事であり、決してあきらめない「ネバーギブアップ」の精神を若い世代へ伝え続けた被爆者。こうした被爆者の体験に基づく貴重な平和への思いを伝えていくことが、ますます大切になっています。

しかしながら、米国とロシアが世界の核弾頭の約9割を保有し続け、またロシアによるウクライナ侵攻や混迷を極める中東情勢を背景に、世界中で軍備増強の動きが加速しています。各国の為政者の中では、こうした現状に強くとらわれ、「自国を守るためには、核兵器の保有もやむを得ない」という考え方が強まりつつあります。こうした事態は、国際社会が過去の悲惨な歴史から得た教訓を無にすると同時に、これまで築き上げてきた平和構築のための枠組みを大きく揺るがすものです。

このような国家が中心となる世界情勢にあっても、私たち市民は決してあきらめることなく、真に平和な世界の実現に向けて、核兵器廃絶への思いを市民社会の総意にしていかなければなりません。そのために、次代を担う若い世代には、軍事費や安全保障、さらには核兵器のあり方は、自分たちの将来に非人道的な結末をもたらさし得る課題であることを自覚していただきたい。その上で、市民社会の総意を形成するための活動を先導し、市民レベルの取組の輪を広げてほしいのです。その際心に留めておくべきことは、自分よりも他者の立場を重視する考え方を優先することが大切であり、そうすることで人類は多くの混乱や紛争を解決し、現在に至っているということです。こうしたことを踏まえれば、国家は自国のことのみならず専念して他国を無視してはならないということです。

また、市民レベルの取組の輪を広げる際には、連帯が不可欠となることから、「平和文化」の振興にもつながる文化芸術活動やスポーツを通じた交流などを活性化していくことが重要になります。とりわけ若い世代が先導する「平和文化」の振興とは、決して難しいことではな

く、例えば、平和をテーマとした絵の制作や音楽活動に参加する、あるいは被爆樹木の種や二世の苗木を育てるなど、自分たちが日々の生活の中でできることを見つけ、行動することで、広島市は、皆さんが「平和文化」に触れることのできる場を提供し続けます。そして、被爆者を始め先人の助け合いの精神を基に創り上げられた「平和文化」が国境を越えて広がっていけば、必ずや核抑止力に依存する為政者の政策転換を促すこととなります。

世界中の為政者の皆さん。自国のことのみで専念する安全保障政策そのものが国と国との争いを生み出すものになってはいませんか。核兵器を含む軍事力の強化を進める国こそ、核兵器に依存しないための建設的な議論をする責任があるのではないですか。世界中の為政者の皆さん。広島を訪れ、被爆の実相を自ら確かめてください。平和を願う「ヒロシマの心」を理解し、対話を通じた信頼関係に基づく安全保障体制の構築に向けた議論をすぐにでも開始すべきではないですか。

日本政府には、唯一の戦争被爆国として、また恒久平和を念願する国民の代表として、国際社会の分断解消に向け主導的な役割を果たしていただきたい。広島市は、世界最大の平和首都のネットワークへと発展し、更なる拡大を目指す平和首長会議の会長都市として、世界の8,500を超える加盟都市と連帯し、武力の対極にある「平和文化」を世界中に根付かせることで、為政者の政策転換を促していきます。核兵器禁止条約の締約国となることは、ノーベル平和賞を受賞した日本原水爆被害者団体協議会を含む被爆者の願いに込め、「ヒロシマの心」を体現することにほかなりません。また、核兵器禁止条約は、機能不全に陥りかねないNPT(核兵器不拡散条約)が国際的な核軍縮・不拡散体制の礎石として有効に機能するための後ろ盾になるはずで、是非とも来年開催される核兵器禁止条約の第1回再検討会議にオブザーバー参加していただきたい。また、核実験による放射線被害への地球規模での対応が課題となっている中、平均年齢が86歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩にしっかりと寄り添い、在外被爆者を含む被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆80周年の平和祈念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、決意を新たに、人類の悲願である核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に、これからも力を尽くすことを誓います。

令和7年(2025年)8月6日

まつい かずみ
広島市長 松井 一實

3 (広島) こども代表「平和への誓い」

いつかはおとずれる、被爆者のいない世界。

おな あやま く かえ おお ひと じじつ し ひつよう
同じ過ちを繰り返さないために、多くの人々が事実を知る必要があります。

げんしばくだん とうか ひ おも う
原子爆弾が投下されたあの日のことを、思い浮かべたことはありますか。

しょうわ ねん ねん がつ にち ごぜん じ ふん
昭和20年(1945年)8月6日 午前8時15分。

ひろしま じんるいはつ げんしばくだん とうか いっしゆん あ まえ にちじょう き
この広島に人類初の原子爆弾が投下され、一瞬にして当たり前の日常が消えました。

だれ わ かな ひ ふ ひとびと
誰なのか分からないくらい皮膚がただれた人々。

なみだ と ぜつぼう こえ
涙とともに止まらない、絶望の声。

いっぱつ げんしばくだん おお いのち うば ひとびと じんせい か
一発の原子爆弾は、多くの命を奪い、人々の人生を変えたのです。

ひばく ねん た いま
被爆から80年が経つ今、

ほんとう つら おも だ きおく つた ひばくしゃ かたがた
本当は辛くて、思い出したくない記憶を伝えてくださる被爆者の方々から、

ちよくせつはなし き きかい すく
直接話を聞く機会は少なくなっています。

とき なが ひげき ふうか
どんなに時が流れても、あの悲劇を風化させず、

きろく ひばくしゃ こえ つぎ せだい かた つ しめい わたし
記録として被爆者の声を次の世代へ語り継いでいく使命が、私たちにはあります。

せかい いま せんそう お
世界では、今もどこかで戦争が起きています。

たいせつ ひと うしな い ぜつぼう ひとびと
大切な人を失い、生きることに絶望している人々がたくさんいます。

じじつ じぶん かんが へいわ かんしん
その事実を自分のこととして考え、平和について関心をもつこと。

たようせい みと あいて りかい
多様性を認め、相手のことを理解しようとする事。

ひとりひとり あいて かんが よ そ おも こころ はな あ
一人一人が相手の考えに寄り添い、思いやりの心で話し合うことができれば、

きず かな おも ひと
傷つき、悲しい思いをする人がいなくなるはずです。

まわ ひと すこ こうどう
周りの人たちのために、ほんの少し行動することが、

せかい へいわ
いずれ世界の平和につながるのではないのでしょうか。

One voice

ひと こえ まな じじつ おも こ つた へんか
たとえ一つの声でも、学んだ事実に思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができる

おとな わたし へいわ こうどう
はずです。大人だけでなく、こどもである私たちも平和のために行動することができます

ひ できごと れきし ふたど く かえ
す。あの日の出来事を、ヒロシマの歴史を、二度と繰り返さないために、

わたし ひばくしゃ かたがた おも かた つ ひとりひとり こえ つむ へいわ つく あ
私たちが、被爆者の方々の思いを語り継ぎ、一人一人の声を紡ぎながら、平和を創り上

げていきます。

令和7年(2025年)8月6日

こども代表 広島市立皆実小学校

広島市立祇園小学校

6年 せきぐち ちえり
関口 千恵璃

6年 ささき しゆん
佐々木 駿



令和7年度
親子ひろしま訪問団
訪問の記録

編集発行 秦野市文化スポーツ部文化振興課
〒257-8501 秦野市桜町1-3-2
TEL 0463-86-6309